

令和5年度

杉並区立杉並第九小学校 学校評価

内部評価

—教員による校内の評価—

*学校評価についてのお問い合わせは
下記までお願いします。

杉並区立杉並第九小学校
副校長 浅田 透
03-3390-0167

学校目標「かしこく」「ゆたかに」「たくましく」の実現に向けて
今年度の取り組みを振り返りました。

「かしこく」の実現に向けて

—学校と家庭のよりよい連携について—

課題

- ・「杉九スタンダード」をもとにした学校と家庭の連携を十分に図る必要がある。
- ・登校時間や学習用具の用意等、基本的な生活習慣定着に課題が残る。

対策

- ・児童に対して、年度初めと学期ごとに、生活目標と関連付けて「杉九スタンダード」についての指導を継続して行う。
- ・引き続き、年度初めの保護者会で、保護者に周知・確認の上、家庭との連携を図る。
- ・児童の振り返りを学校生活の様々な場面で実施していく。

「かしこく」の実現に向けて

—1人1台タブレット端末を活用した
個別最適な学習の実践に向けて—

課題

- ・児童のよりよいタブレット活用のスキルを向上させていく必要がある。
- ・タブレット活用に関連した情報モラル教育の充実が必要である。

対策

- ・他校のよりよい実践を参考にして、教職員の研修の充実を図る。
- ・セーフティ教室や朝学習の時間を活用して情報モラル教育を行う。
- ・「タブレット使用のやくそく」を実態に合わせて、改定する。
- ・学校支援本部に、ゲストティーチャーの招聘について協力を仰ぐ。

「ゆたかに」の実現に向けて

—多様性を認め、ちがいを生かし合う児童の育成—
課題

- ・児童一人一人のよさを発見し、生かしていくための児童理解の充実をさらに図る必要がある。
- ・全教職員で全校児童を見守っていく指導体制の構築が必要である。
- ・児童同士の合意形成力をさらに伸ばしていく必要がある。

対策

- ・各学級児童の様子や状況の情報共有を図る時間を確保する。
- ・スクールカウンセラー、すぎく教室と連携し、多角的、多面的な指導体制を構築する。
- ・学級会、道徳の時間を活用して、児童の合意形成力を高めていく。

「たくましく」の実現に向けて

—活力ある、意欲ある児童の育成—
課題

課題

- ・児童の体力が低下傾向にある。遊び方に偏りがあり、多様な体の動かし方につながない。
- ・全児童の外遊びを推奨したいが、校庭の広さが限られる。

対策

- ・いかに児童の体力を向上させるかという視点で「体力向上プロジェクト」を推進する。
- ・運動委員会による、全校で取り組める集会を計画し、体を動かす機会を増やす。
- ・休み時間の体育館の使用等、遊び場所の相違工夫を検討していく。

外部評価 —学校評価委員会による評価—

*学校評価委員会は、学校運営協議会委員と現PTA会長により、令和6年2月16日（金）に開催されました。
この外部評価を考慮した上で、令和6年度の教育課程を作成し、学校運営協議会にて承認されました。

保護者アンケートの質問「学校は、いじめを絶対に許さないという雰囲気がある」について

主な意見

- ・「学校は、いじめを絶対に許さないという雰囲気がある」という質問への、保護者の回答が「どちらともいえない」が38.5%と多い。
- ・調査の質問項目の表現が分かりづらい。学校の実情が「分からない」ことが「どちらともいえない」の回答につながっているのではないかと。アンケートの質問項目に対して、保護者の得ている情報が少ないことが、「どちらともいえない」という回答になっている。
- ・学校はいじめを絶対に許さないという姿勢を、今以上に積極的に強く発信していく必要がある。
- ・「どちらともいえない」という回答の中には、「問題はない」という意図で回答している保護者も含まれていると考えられる。教育委員会と相談しながら、質問の表現を工夫していく。

保護者の学校理解について

主な意見

- ・保護者会への参加が少なくなっている。担任と直接話せば分かる、保護者会に来ることでもっとよく分かるという内容が、保護者に伝わっていないのではないかと。
- ・PTA役員として、学校に出入りしていることで分かることも多い。そうでない保護者の方は分からないことが多いかもしれない。この傾向が、今後さらに強くならないためにも、何らかの手立てが必要である。
- ・学校はキャリア教育に重点を置き、児童が「どんな生き方をしたいのか」を問う教育を進めている。その学校の姿勢が、児童の言葉を通して、保護者にさらに伝わっていくことを期待する。
- ・引き続き、保護者に学校を公開し、推し進めている教育活動がさらに見えるようにして欲しい。本校は、高学年で教科担任制を取り入れ、複数の教員で一人一人の児童の理解を深めようとしている。その取組の効果が少しずつ浸透していき、成果につながっていくと考えている。

教師の児童理解について

主な意見

- ・学校は、児童の主体的な学びを推進しているが、児童自身は主体的に学べていないという回答も多かった。学校の思いや努力が児童に確実に伝わっていない。その距離を縮めていく必要がある。先生たちは真摯に指導に取り組んでいるが、児童の感覚とのずれが生まれているのではないかと。
- ・アンケート結果から、自己肯定感が低い児童の割合が多いクラスが分かる。何らかの手立てが必要である。

学校の働き方改革について

主な意見

- ・ 教員のアンケートの質問「勤務する学校は、働き方改革に意識的に取り組んでいる」に、「どちらともいえない」という回答が多い。遅くまで残っている教員の数は減ってきているが、改革の働きかけによって、効果が上がったと考える教員は少ないのではないか。
- ・ 「前任校と比べて大きな変化が感じられない」と「どちらともいえない」との回答が多い。他校の実態を教員が知らない、もしくは知り得ない環境にあるのではないか。
- ・ 「働き方改革」という名目のもと、勤務時間が終わった途端に帰宅する教員が多い学校は、保護者の信頼に応えられるのか。保護者が相談したいことがあっても、教員が職員室にいない、ということにならない対応や工夫も必要である。

教師の仕事への誇りややりがいについて

主な意見

- ・ 「誇りややりがいをもって仕事を行うことができている」の質問に対して、「どちらともいえない」と回答した教員が少しだけいる。教師には、子どもの成長を喜びにしてもらいたい。
- ・ 教師が働きがいを感じて働くことが、児童の教育につながる。そのために勤務時間が長くなる状況も考えられる。「働き方改革」の視点もあり、難しい時代を迎えている。
- ・ 「これがやりたいから、教師をやっている」という気概がないと、「やらされている」意識が残る。
- ・ 教師が仕事に誇りをもてるように、管理職には支援してもらいたい。学校評議委員会もそれをバックアップする。

学校組織、教師を支援する体制について

主な意見

- ・ 学級経営に困っている教員の姿がアンケートから見て取れる。それを拾い上げ、組織として支援して欲しい。学年教員の協力体制によって、相互支援の体制をとっている様子はどうかがえるが、その体制が機能しきれていないのではないか。隣のクラス担任に相談しづらくなっていないか配慮してほしい。学年体制が円滑に機能する学校であって欲しい。
- ・ 若手教員が増え、援助が必要である。学年全体で若手を育成する意識と、若手教員とその担当学級を学年全体で見ていこうとする意識をもつ教員が多くなった。高学年の教科担任制はよい取り組みである。この制度がさらに浸透することで、児童を多くの教師で多面的に見る、また、孤立する教員をつくらない学校になっていく。それも「働き方改革」につながっていく。
- ・ 学校という職場は、「その先生にしかできない職務」が多いように感じる。組織内のバックアップ体制が少ない。担当者が休んだことでストップする業務があると感じる。分掌を複数人で運営し、連携を増やすことが、ライフワークバランスや長時間勤務の解消にもつながるのではないか。さらにそれが、教師という仕事に誇りをもつことにも繋がっていくのではないか。